

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなことをお伝えします！

12

社会の見えない壁を感じたら

必要な知識と情報

かみね

加峯

きみ

貴美

NPO法人
福岡ジェンダー研究所職員
臨床心理士／公認心理師

福岡市東区出身。高校生の時に受けた模擬授業をきっかけに心理学に興味を持つ。臨床心理士資格を取得後、産休・育休明けに子どもがいるという理由で不本意な部署への配置転換を経験をした。再就職活動中にジェンダー研究所の相談員募集の話を知り応募。現在はDV相談員のほか、発達心配なお子さんをお持ちの保護者をメインに面談しサポートする相談に携わる



臨床心理士の資格を活かして 働きたい私の復職と再就職

臨床心理士の資格を活かして働いていたときに、産休、育休を経験しました。

復職時に、「子持ちはいつ休むかわからないから、使いにくい」と上司に言われ、心無い言葉に傷ついたことを誰にも相談できませんでした。結局、臨床心理士としての職場復帰はできず、不本意ながら配置転換で他の部署で働き、当時はそんなものかと思っていました。その時の気持ちは、私が仕事を辞めたら子どもがせつかく入れた保育園をやめなくてはいけないことでした。子どもはかわいいと思う一方で、このまま仕事が見つけれないのでは、社会復帰できないのではという心配と焦りを感じました。夫に対して「働いていない」という気兼ねや、負い目もありました。働きながら再就職活動をしていた時に、お世話になった先生から「NPO法人福岡ジェンダー研究所（以下、ジェン研※）」の相談員募集の話を聞き、応募しました。現在はDV相談のホットラインで相談員をしています。

職場復帰直後は、子育てと仕事の両立の難しさに夫との関係も難航しましたが、その度に折り合いをつけてきました。その中で、町の保健師さんが親身になって話を聞いてくださって、この苦しみは、私だけじゃない、お母さんになった人は多かれ少なかれ持つ経験なんだと気づけたときに、ホッとしました。それと同時に、気持ちを吐き出す場所の大切さを改めて感じました。また、産後、働きながら再就職先を探しをしているときに、すごく気持ちが沈んだ経験から、母親への支援の必要性を感じ、宇美町でも臨床心理士として働き始めました。仕事では、発達心配なお子さんをお持ちの保護者をメインに面談しサポートするような支援をしています。

※NPO法人福岡ジェンダー研究所とは
男女共同参画社会実現のために、女性のための相談事業、DV・セクハラ・パワハラ防止に向けた研修、男女共同参画に関わる調査・研究を中心に様々な活動を展開している団体です。



様々な相談窓口につながるカードやチラシ



ジェンダー格差。制度改革は進んでも、現状はまだまだ変わらない

日本では、共働き家庭が7割近くありますが、「自分は仕事が忙しいから」と、家や子どものことを女性に任せきりにする男性もあり、「ジェンダー格差」はなくなっていない。保育園の送迎をする父親は増えてきており、徐々に積極的に育児に参加する男性も増えていますが、世間が言うほど、実際は、夫婦で協力して育児というのは進んでいないと感じています。子育て、家事を担うのは女性の割合が圧倒的に多いままですね。



誰にも相談できない人を、解決に導くために

DV相談員をしていると、一人ひとりがそんなに気張らなくていい、力が入りすぎているから少し力を抜いて生活すると気持ちが楽になるのと思うケースによく出会います。相談員は相談者に寄り添うというスタンスを大事にしています。孤立や孤独を感じている人が多いので、一人で悩まずに他の人に話すことで、少し心に余裕ができるようにとじっくりお話をうかがいます。自分がしんどいと、気持ちが縮こまり考えが凝り固まってしまうからです。そういうときに一緒に話せる人がいると、縮こまった気持ちに、少し空間ができると思います。

情報が届かなくて、相談窓口につながらない人がいます。例えばジェン研では、デートDVの普及啓発講座を中・高生にも実施していますが、DVは、夫婦だけじゃなくて恋人同士でも起こるものです。

「これってDVなんだ」と気づくために知識を得る機会を持ってほしいなと思います。DVを受けないために、DVをしないために、知識を持ってほ

しい。知識は、自分を守る武器になるので心に余裕が生まれます。「自分が悪い」と思い込まずに、気づくことが相談の第一歩です。気づくことができると良いですね。

例えば、児童相談所に相談したからといっていきなり子どもを取り上げるなんてないです。

解決策は何通りもあります。各相談施設があることを知っておくと、相談へ行きやすくなり選択肢も増え、解決策を見つけることができます。勤めている人ならば、健康度チェックリストで心身の状態を見極め、相談につなぐことができます。DV相談員として対応しているときに「情報はもれませんか」と聞かれます。守秘義務があるので決してもらえることはありません。気軽にご相談ください。



協働で防災ハンドブック作成 多様な視点はみんなのために

現在、みんなが利用しやすいハンドブックを作ろうと取り組んでいます。従来の防災ハンドブックは、高齢者、子育て世帯、障がいを持つ方、外国人、LGBTQの方などの多様性を考慮していませんでした。志免町の生活安全課とジェン研が協働する様子を見せていくことで、多様な視点という部分が志免町内に伝わっていくと期待しています。支援や相談もですが、どこにも所属できず、情報が届かない、情報がないから支援につながらない人が増えています。必要な時に、必要な情報を必要な人に届けられるよう発信する大切さを感じています。



取材を終えて

コロナ禍で集まらない、人と会えないなどの理由で情報が届かず、必要な支援につながらない人が増えています。孤独な人や孤立している人は、すぐに情報弱者となってしまう。情報を届ける難しさも感じます。皆さんは、困った時に、必要な支援に繋がれますか。

